



庭園内を歩く来園者と、竹の花器に飾られたツバキ
 「木の器展」展示作品

ツバキ彩る松花堂

松花堂庭園に咲くツバキを楽しんでもらう「松花堂つばきウィーク」が3月5日〜13日に開催され、約1000人の来園者が色とりどりのツバキを堪能しました。

このイベントは、例年4月に開催していた「松花堂つばき展」に替えて初めて実施。ツバキの開花時期に合わせることで、より多くの人にツバキの魅力を感じてもらおうと同庭園が企画しました。

この時期は、薄いピンク色の「京雅」や白いまだらが入った「岩根紋」などが花を咲かせて来園者をお迎え。各所には、趣向を凝らした竹の花器にツバキが飾られ、園内が華やかな雰囲気になりました。



また、期間内には関連企画で、八幡市出身の木器作家・前田昌輝さんの作品を茶室に飾った「木の器展」も開催され、来園者はツバキを眺めながら庭園でのひとときを楽しんでいました。

庭園を訪れた石野陽子さん(42)は、「初めて来ましたが、多種のツバキや工夫された竹細工など見どころが多く楽しめました」と話していました。

直木賞作家の澤田瞳子さんを招いたトークイベントが3月21日、松花堂美術館で行われ、澤田さんが約40人の来場者を前に創作への思いなどを話しました。

江戸時代の石清水八幡宮の社僧・松花堂昭乗が、書や茶の湯などを介してさまざまな著名人と交流したことから、同館が「松花堂文化サロン」として企画。イベントの様子は、オンラインでも配信されました。

澤田さんは、平成22年に

直木賞作家 澤田瞳子さん語る



小説の創作について話す澤田さん

歴史・時代小説家としてデビューし、昨年に天才絵師・河鍋晩斎の娘の半生を描いた『星落ちて、なお』で直木賞を受賞。「私自身が史料に書いていないことを知りたい」という思いが創作の源で、さまざまな史料を読み解いては、その時代を生きた人たちに思いをはせます。

また、八幡やその周辺は古くから交通の要衝で、さまざまな歴史上の人物が行き来したと解説。「歴史は掘り下げていくと、どんな場所にも物語がある」と話し、八幡を巡る歴史にも興味を示していました。

まちの話題

このページでは、市民の皆さんの活躍やまちの話題などを紹介しています。身近な話題や、広報紙についての意見を、秘書広報課までお寄せください。

記念品のフォト刺しゅうを手にする川崎さん(右から2人目)



川崎乃瑚さん 30万人目に認定

3月12日、さくらであい館の展望塔の来館者が30万人を達成。30万人目の来館者に認定証などを贈る式典が行われました。

同館は周辺地域の交流や振興、観光周遊の促進を目的に国土交通省が整備し、平成29年3月に開館。展望塔は八角堂をイメージした外観で、高さ約25mの展望室からは360度の眺望が広がります。

30万人目の来館者となったのは、川崎乃瑚さん(10)。これまでも展望塔に4度ほど訪れており、今回は両親と参加していた市主催の「まちウオーク」で、同館がチェックポイントであったことから来館しました。

式典では、淀川河川事務所事務局長から川崎さんに来館者30万人目の認定証を授与。また記念品として、背割堤の桜並木をモチーフにしたフォト刺しゅうが贈られました。

川崎さんは、「こんな機会はあまりないのでうれしいです」と笑顔で話していました。

今月のこの人 八幡の「先達」観光客をガイド



やわた観光ガイド協会

市の支援などを受けて平成13年に設立。会員数は令和4年2月末時点で42人。

平成13年に設立し、令和3年に20周年を迎えたやわた観光ガイド協会。同会会長の中村正孝さんは「紆余曲折あって20年、よく会員全員が頑張ってきたなと思います」と、これまでの歩みを振り返ります。

「観光ガイドは徒然草にある『先達』(一案内人)である」との思いを胸に、観光客をガイドしてきた同会。平成27年からは京阪八幡市駅(当時)前に開設した観光情報ハウスの運営を任せられ、情報の発信も担ってきました。

その功績がたたえられ、昨年には京都府観光連盟や市から功労者表彰を受けました。また、石清水八幡宮の御本社内の案内も初めて務め、「お寺や神社の協力がなかったら、現在のようには会を継続できなかった」と感謝の思いが溢れます。

現在はコロナ禍で思うように活動できない日々ですが、「今年は3

年ぶりに背割堤で桜のガイドをするので、感染対策をしっかりと活動したい」と前を向く中村さん。「コロナが終息したら研修も充実させたいですね」と同会は研鑽を積み続け、これからも八幡の「先達」として観光客をガイドします。

本コーナーでは、市にゆかりのある人物や団体を紹介しています。詳しくは、市ホームページまたは秘書広報課へ。